

16世紀の西欧精神史におけるヒューマニズムの特質を中世哲学との関連を考慮しながら問題にしたい。

アルプス以北のヒューマニズム運動は、宗教改革と結びついて展開し、なによりも聖書文献学において大きな成果を収めている。当時ルフェーブル＝デターブル、ジョン・コレット、ロイヒリン、エラスムス等が代表的ヒューマニストとして活躍し、宗教改革者の聖書神学に決定的な影響を与えている。たとえばルフェーブルとエラスムスとの初期ルターに与えた影響を見るならば、明らかである。しかるに宗教改革者たち（ルター、ツヴィングリ、カルヴァン）はいずれもヒューマニズムと袂を分かつ道歩んでいる。この二つの運動はなにゆえ両立から対立へと不幸にも転向せざるを得なかったのか。ここにこの時期のヒューマニズムの特質を捉えることができよう。とくにエラスムスとルターとの間に生じた自由意志論争をとおしてこの点を明らかにしてみたい。

エラスムスの『自由意志論』(De libero arbitrio, 1524) はルターを批判したものであるが、論争のため彼本来の姿が明瞭でないので、初期の『エンキリディオン』(Enchiridion militis christiani, 1503) から思想の基本的特質を捉えておく必要がある。ここに彼のキリスト教ヒューマニズムの思想がプラトン哲学とパウロ神学との総合において提示されている。ディルタイはこの総合を「宗教的普遍主義的有神論」にある、つまり神性がすべての人間の意識の中で働いているという理念にある、と主張する(『15・6世紀における人間の把握と分析』1892)。人間における神性の承認こそルネサンス的「人間の尊厳」(ピコ)にも通じ、エラスムスの『エンキリディオン』の人間観から『新約聖書序言』(1516)の「キリストの哲学」とおって『自由意志論』の「自由意志の定義」にまで展開しているヒューマニズムの基本的特質であるといえよう。

ところでディルタイの先の主張における問題点は普遍主義的有神論がエラスムス

に認められるとしても、エラスムス自身はあくまでキリスト教信仰の立場において異教の哲学との一致を捉え、この一致において真理を確認している点である。実はここに彼のキリスト教ヒューマニズムの精神的特質があって、この点でエルフルトのヒューマニストであるムティアヌス・ルフス（1471—1526）と相違している。

エラスムスはキリスト教信仰に立ってそれとプラトン哲学との一致を真理として主張しているが、この真理観が影響してパウロをもプラトンのように解釈するようになっている。人間学的区分法の中にこれが端的に示されている。つまりパウロの言う「霊と肉」(spiritus et caro) という神に対する人間の態度の区分が「理性と身体」(ratio et corpus) という自然本性的構成へと分解されてしまう。さらに彼は理性が身体を支配するように神も援助すると主張する。人間が主体であり、それがどこまでも内面的構成から考察されているのみならず、神もまた外側から恵みをもって人間を助けるにすぎない。ここに人間を人間から考察する視点が開かれ、ヒューマニズムの精神が明らかであるが、キリスト教信仰もこれを支えているものとみなされる。かかるキリスト教ヒューマニズムのもつ問題性はルターとの論争であらわになってくる。

エラスムスのルター批判に対し『奴隷意志論』(1525)が出版され、両者の対立は顕在化する。エラスムスがルター神学に賛同しがたいとした論点は実際ヒューマニズムの生死にかかわる性質のものであり、しかもアウグスティヌスとペラギウスの論争以来中世哲学を貫通する大問題であった。彼は教会制度や政治に関する訴訟（教皇制、浄罪罪、贖宥状など）ではなく、ルターと心情の奥底において意見を異にし、信仰の点できびしく対立し、キリスト教の教説の中心にして永遠的な論点をとあげた。だからルターも彼に「あなただけが事柄そのものを、つまり訴訟の核心を捉え、事態の要諦を見、急所を突いた」と語っている。この論争は神の恩恵と人間の自由意志との関係をめぐる神学的な問題であった。つまり宗教的救済に対し人間の自主性や責任性をどのように理解すべきかということで、「人間の尊厳」を説くヒューマニズムと「神の独占活動」を説く宗教改革とが激しく対決することになった。ここではエラスムスのキリスト教ヒューマニズムの特質を明らかにしているとされる論点を考察してみたい。

1. 自由意志の定義をめぐらる問題

エラスムスのルター批判の最大の論点は、『レオ10世の新教書により有罪とされたルター博士の全条項の主張』(1520)で論じられた「生起するものはすべて単なる必然性から生じる」という命題に向けられている。ルターは墮罪以後の人間の意志は無力のゆえに神の恩恵なしには救いを達成し得ないことを力説し、このことを形而上学的絶対必然性の主張をもって補説的に論じた。この命題に批判は集中し、こういう必然性に立つなら決定論に陥り、人間の応答的責任性が失われるとエラスムスは批判して、自由意志を次のように定義する。「わたしたちはここで自由意志を、それによって人間が永遠の救いへと導くものへと自分自身を適応させたり、あるいはそれから離反したりし得る人間の意志の力であると考え」。ルターはこの定義が墮罪以前の完全なる本性を述べたのか、それとも罪の現状を述べたのか不明確であると言い、かつ、もし人間の意志により恩恵を獲得し永遠の救いに到りうるなら、人間に神性を帰するものであると批判する。エラスムスは信仰の発端を自由意志におき、アウグスティヌスよりもペラギウス寄りに自分を位置づけているゆえに、セミ・ペラギウス主義、もしくはオッカム主義の契約神学の立場に近いといえよう。ルターはこの契約神学により救済を得ようと苦闘した経験から自己の神学を形成したのであるから、それに対決し、批判するのは当然である。

2. 原罪の理解について

次にエラスムスが原罪をいかに把握しているかが重要な論争点となっている。彼によると理性と意志とは罪により暗く無力となったが、根絶されているのではない。その毀損の程度は自力で善に向かい得ず、罪の奴隷となり、徳を行なうのに有効でない状態である。したがって自由意志を取り除くのは行き過ぎであり、人間の責任を示す自由意志は認めるべきである。「多少のものを自由意志に帰し、恩恵に多大のものを帰している人々の見解にわたしは同意する」。このように彼は「最小限度」(minimum)の自由意志を認めている。それはまた「多少のもの」(nonnihil)を指し、ルターの主張する「無」(nihil)をもう一度否定するものとなっている。ところがルターは、不敬虔な意志でも何ものかであって無ではないことは自明だが、「神の前にあるという存在の仕方では無である」、つまりエラスムスのいう nonnihil とは言えないと反論している。エラスムスが道徳的責任の主体を考えているところでルターは宗教的罪性の自覚に達しているといえよう。

3. 共働説に関する問題

自由意志と恩恵との関係は(1)ペラギウス主義のように自由意志から恩恵へと連続的に考える立場と、(2)ルターのようにあれかこれかと排他的に設定する立場と、(3)両者を何らかの形で両立させようとする共働説の立場との三つの類型が考えられる。エラスムスは共働説を主張するが、全行為を開始・進展・完成と分け、中間の進展で自由意志は恩恵と共働するにすぎず、主原因たる恩恵に対する二次的なもので、主原因なしには何事もなし得ないと言う。だから自由意志は恩恵に全く依存的存在である。アウグスティヌスでは「共働的恩恵」(gratia cooperans)に「活動的恩恵」(gratia operans)が先行し、善い意志を創りだし、「自由にされた自由意志」とされ、共働的恩恵の導により善が実行されると説かれているため、本来の共働説とは言いがたい。エラスムスでは共働するのは自由意志であるが、それは中間の進展の部分にすぎず開始は恩恵によるところでは説かれているため、セミ・ペラギウス主義よりもさらに自由意志を制限する新セミ・ペラギウス主義というべきであろう。ルターは恩恵と自由意志とを排他的に捉えるため一般には支持しがたいと考えられているが、恩恵と奴隷意志との関係は「恩恵のみ」の主張となり、こうして排他的でありながらも逆説的に人間の主体に結びついている。この場合人間の主体はもはや自由意志ではなく信仰であると語られ、恩恵と自由意志は排他的であっても、恩恵と良心は相関的になっている。

4. 自由の問題

エラスムスは自由意志の下で自然本性がもつ「自律」を捉え、外的儀礼に拘束された他律を批判する。だが、本性的な自由は即自的であり、自己主張欲になり、我欲のとりことなりやすい。この「自己への歪曲性」こそルターにとり罪の実体であり、自我の牢獄に閉じこめられた罪の主体として悪をなさざるを得ない。この罪の奴隷からの解放がなければ、真の自由は成立しない。ルターは「自律」としての自由意志を神にのみ認め、もしこれを人間に認めるならば自己神化となるという。こうして彼は自由をエラスムスのように自然本性のうちに即自的に認めるのではなく、かかる自由の否定である奴隷からの救済として弁証法的に捉えているといえよう。

5. ヒューマニズムの二類型

自由意志をめぐるこの論争によりヒューマニズムに内在する問題が明らかになった。エラスムスは人間性の偉大な可能性を認める理想主義的ヒューマニズムに立っているのに対し、ルターは人間性の罪と卑小さから逆説的にその偉大さを信じる現実主義的ヒューマニズムに立っている。エラスムスが知的洞察をもって人間の尊厳を力説するところで、ルターは宗教的洞察により神に反逆する罪を捉えている。そのさい「ヒューマニズムの自己破壊的弁証法」（ベルジャイエフ）や「ヒューマニズムの悲劇」（フィンシュトック）が人間の有限性を超えて自己神化に陥る場合には生じていることに注意しなければならない。ルターはエラスムスの説く「人格の尊厳」（*dignitas personae*）は「恩恵による義」と矛盾するので神の前には役立たないと言う。彼においては人間の尊厳よりも「神の壮厳」（*majestas Dei*）の方が優越した事態となっている。この論争は *dignitas hominis* と *majestas Dei* の双方を中心的主題として対決させており、そこに人間性の偉大と卑小、栄光と悲劇が織り込まれて展開しているといえよう。